

受賞作品

関わりあう職場のマネジメント



鈴木竜太著

有斐閣 ix,249 ページ、2500 円（税別）

書評

現場の声拾い仮説と考察

東京理科大学教授 伊丹敬之

小さな本だが、いい香りのする佳作である。まず、基本的なメッセージが魅力的である。「仕事上相互に関わりあうことが多い職場は、仲間を助けること、組織のルールややるべきことをきっちりこなすこと、そして自律的に仕事の上で創意工夫することを職場のメンバーに促す」——まさに、そういうことが重要だというのである。

もちろん、それには「促す」ための組織のマネジメントが必要である。上からのマネジメントも下からのマネジメントも必要だ、と著者はいう。この視点も斬新である。

著者はまず、一つの職場をとりあげて、詳細なインタビューなどから関わりあう職場の現場の声を拾い上げる。そこから浮かび上がる仮説を、複数の職場でのアンケート調査という定量的方法で検証していく。その仮説の学説史的位置づけや、その仮説が要請する新しいマネジメントのあり方についての著者の見解の考察も行われている。

メッセージの魅力、視点の新しさ、研究の方法が現場の定性観察と定量測定を組み合わせていること、そして新しいマネジメントへの提言。これらの諸要素が高いレベルで絡み合った本は少ない。香りがいい、というゆえんである。

しかし、「佳作」というのは、ボリューム感への望蜀の念がどうしてもするからである。これだけの面白いテーマである。もう少し事例やデータや考察が量的に多く欲しかった。それであれば、著者のメッセージの説得性はさらに増しただろう。